

【入選】

さくらんぼ座

何度も夜を折り返していた
 窓をあけると星が指をさしている
 ふと手が伸びて
 星座をまたいで
 銀河を渡るほくは
 でたためにハミングして
 鏡は口角だけに光を灯す
 ふたつのさくらんぼは
 明日にはもうほどこけている
 いくつも考える人生だった
 星つぶを拾って 小さくなる街眺めて
 ふと思い出して 背中がじんわり汗ばんで
 鏡の目の奥で ふりそめの星が瞬く
 静かな真似ごとで結んだ星座はさくらんぼ

ほくらが渡る銀河は
 幻じゃないものを
 こうやって大切に遠くのままにしている
 それはまるで 向かい合っているような
 遠くで音もなく星が落ちていくような

コメント

夜は何度も折り返し、人はそのたびに自分を見失います。
 理想を追うときよりも、理想を見いだせないときのほうが苦しみは深く、この詩はその空白から始まります。
 やがて現れた星は、彼の憧れであり喪失の予感でもあります。
 手を伸ばしても届かないからこそ美しく、けれど遠くを見つめるほど地上の何がほどこけていく。
 鏡に映る笑顔は自分でありながら、どこか別の存在。
 けれど、じんわりと汗ばむ背中には、まだ確かな体温が残っています。
 地上の私と星を指す私、その二つを線で結んだとき、浮かび上がるのはさくらんぼのかたち。
 だからこの詩は「さくらんぼ座」と名づけました。
 遠い理想と近い自分、そのあわいに光るものを見つめる視線を描いた作品です。

外国語学部 スペイン語学科2年 雪江勇太